

## パラグアイの伝統酒産業の考察

—Caña Paraguaya (パラグアイのラム酒) を事例として—

1781004 五十嵐大地 指導教員 藤掛洋子教授

### 【背景と目的】

筆者は大学の海外派遣プログラムでパラグアイに滞在し、活動の中で同国の伝統に対するネガティブな言説を耳にした。本研究は、パラグアイの伝統酒であるカーニャ (Caña) について現地の人々がネガティブなイメージを持つ理由を分析することを通し、同国の歴史と人々の伝統に対する眼差しを考察することを目的とする。

### 【研究方法】

文献資料を基に現代に至るまでのパラグアイの歴史を概観したのち、文献調査と質的調査によって人々のカーニャに対する知覚イメージを探る。歴史研究とイメージ調査によって得られた知見を照らし合わせることでネガティブイメージが生成される要因を考察する。

### 【研究結果・考察】

パラグアイの歴史の特徴として度重なるコミュニティの崩壊や統率者に対する不信任感から生まれる秩序の乱れが挙げられる。この国の人々にとってカーニャという酒は、悲惨な現実へ耐え、不安を覆い隠し、復興への気力を高めるための「道具」であり、その都度生まれた負の感情や苦しい記憶の一部をカーニャが背負ってきたのだと考えられる。また、山脇 (2021) が指摘する誇示的消費文化はパラグアイにおいても認められ、

1990 年以降の経済成長の時代には生活様式の急激な変化に伴い、価値観の変化が起こった。経済成長に伴って社会的上昇を果たした人々の間で支配者階層の価値観を有していると示すために自らを着飾るような振る舞いをし、蔑む対象を設定したのだと考えられる。蔑む対象の一つとなったのがカーニャであり、その結果として「道端で酔っ払っている人が飲む酒」、「安くて強い貧乏人の酒」というような言説が拡大したと推察される。

また、カーニャにネガティブな言説が生まれた過程を見る中で特定の文脈においては、伝統を軽視する現象の肯定的な側面も見えてきた。ラテンアメリカ諸国は、植民地時代に経験した強烈な砂糖プランテーションによって既存文化の破壊と西洋的発展の内面化が起きた。しかし、パラグアイにおいてはスペイン人が到来した時代に先住民たちが融和の道を選択したことで過度な文明の破壊を免れた。融和の帰結として独自の文化を創り出し、西欧の支配に囚われない価値観を醸成したと考えられる。パラグアイの人々がカーニャに対してネガティブなイメージを持っていることは、彼ら／彼女らが植民地支配の産物に対して批判的な視点を持つことができているという見方もできる。西洋からもたらされた「伝統」を無批判に受け入れるのではないパラグアイの人々の姿勢を見出すことができた。